五輪会場周辺駅 250億円かけ改修

原宿 千駄ケ谷 信濃町

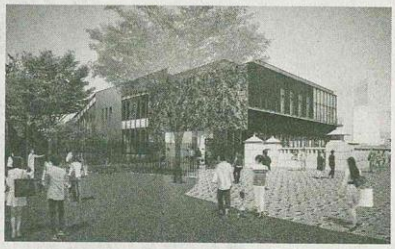
東日本旅客鉄道（JR東日本）は8日、東京五輪のメーン会場に近い原宿、千駄ケ谷、信濃町の3駅で2020年までに改良工事を実施すると発表した。総投資額は250億円。訪日外国人の増加や五輪の開催時をにらみ、改札口や駅のコンコースを拡張する。記者会見で冨田哲郎社長は「20年以降も持続的な効果をもたらす財産にしたい」と述べた。

原宿駅は駅舎を2階建てに建て替え、コンコースや改札口を拡張する。ハンドボール会場となる国立代々木競技場方面の出入り口を新設する。初詣シーズンにのみ使われている臨時ホームを活用し、混雑緩和に向けて、山手線の外回りと内回りでホームを分ける。年内にも着工する。

訪日外国人の利用が増えている原宿駅の乗降客は1日あたり約7万人。乗降客が多いときは入場制限をすることもある。1924年に建設された現在の駅舎は「保存や解体なども含め今後検討する」という。

新国立競技場や東京体育館に近い千駄ケ谷駅と信濃町駅も改良工事を実施。千駄ケ谷駅は89年から使用していない臨時ホームを新宿方面の専用とし、ホームドアを設置する。改札口の広さを2倍程度に広げ、競技の開始前や終了後の混雑に対応する。信濃町駅はエレベーターを増設し、ホームドアを新設する。

JR東日本



原宿駅の新駅舎は20年までに使用を開始する（写真はイメージ）

山手線新型車両 量産開始を発表

JR東日本は8日、山手線の新型車両「E235系」の量産を始めると正式発表した。2020年春までに49編成539両を製造し、すべての車両を置き換える。投資額は600億～700億円規模とみられる。17年度に150～200両を投入する。

E235系は車両の位置や速度などのデータをもとにブレーキやアクセルを自動で制御するシステムを搭載。現在は1編成11両が運行している。山手線の既存車両「E231系」は三鷹―千葉駅間を走る中央・総武緩行線で活用する。

日本経済新聞　平成28年6月9日